
鏡の中の私～プロローグ 「俺と天使？」続編

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中の私／プロローグ 「俺と天使？」 続編

【Zコード】

Z8673R

【作者名】

棟名屋 忍

【あらすじ】

福井希美は瀬名結子の実の妹。両親は離婚し、別々の町で暮らし始めた。しかし、瀬名結子が同じ町に越してきたことで希美は不便な生活を強いられ、不登校になってしまふ。そんな彼女と結子に恋した森村慎吾が出会い……。

(前書き)

この話は現在連載中の「俺と天使?」が完結したあとの続きの作品になる予定です。

世の中には自分に似ている人が三人いるというけれど、身近にそんな人がいたら厄介だ。しかもそれがきょうだいでも親戚でもない他人ならば、厄介どころの話では済まない。私はもう、こんな世界うんざりだ。

「なあ、お前にそつくりの奴が万引きして怒られてたけど、お前のお姉ちゃんじゃない？」

「違う。私、一人っ子だから」

「じゃあ、なんであんなに似てるんだよ」「知らない」

本当は知っている。彼女の正体。彼女の名前は瀬名結子という。私は福井希美。苗字は違うし、こちらは姉だなんて思いたくもないけれど、残念ながら血は繋がっている。現在、私は母のもとで、彼女は父のもとで暮らしている。父は長く転勤でこの町を離れていたのに、最近になつて戻ってきた。しかも、わざわざとなりの団地に引っ越してくるなんてたちが悪い。おかげで同級生にからかわれるようになつてしまつた。

「お前の姉ちゃん、男の人と歩いてたぜ」

「また万引きしたんだって？」

「今度はお酒も飲んだって聞いたけど」

「福井さんも、裏で何かしてるんじゃないの？」

まるで鏡の向こう側の私が悪さをしているみたい。

私は学校が嫌いになつた。家に引きこもつて、誰とも会わなくなつた。一つの救いは母が怒らなかつたこと。家にいて構わないと言

つてくれたことだ。

ある日、テレビで彼女が死んだことを知った。テレビ画面に私そつくりの女の子の写真が映し出されたのだ。瀬名結子。鏡の向こうで悪さした私はもういない。秋になつたら、学校に戻つてもいいかなと思った。

けれど、夏休み明けの学校ではもつと酷い仕打ちを受けることになつてしまつた。「幽霊」、「成仏しろ」、そんな言葉をかけられた。机には花瓶が置いてあつた。私は再び家に引きこもつた。

気がつくと、私は声を失つていた。誰とも話さない日が続いていたから、何時から話せなくなつたのかわからぬ。ますます私は外へ出るのが嫌になつた。

卒業式は保健室登校で勘弁してもらつた。それでも、中学校の入学式は出るようにと釘を刺された。真新しい制服に袖を通して、母に連れられて向かつた夕日町中学校。かつての同級生たちの姿もあるが、親のことを気にしてか誰もちよつかいを出しては来なかつた。

「瀬名？」

男子の声がして振り返ると、そこには背の高い上級生と思しき生徒が立つていた。

「ええと、ごめん。人違いだ」

瀬名結子は、まだ生きている。この中学校に通つていたのだから。吐き気がしてきた。

「希美、大丈夫？」

真つ青な顔をした私が母が支えてくれた。こんな状態で入学式なんてごめんだ。けれど、声が出ない。

「福井さん、だね。とりあえず保健室に行きましょう

さつきの上級生が母と私を誘導した。母は私の担任になる先生に挨拶に行くと言い残して、保健室を出て行つた。

「どうしましたか？」

養護教諭が問い合わせても、私は答えられない。

「青い顔してて、気分が悪そだつたので連れてきました」

「そう。緊張しているのかもね。休んでいく？」

私は小さく頷いた。養護教諭に誘導されて、私はベッドに横たわつた。

「先生、これから一度挨拶に行かないといけないのよね。どうしましょう？」

「僕が看ていますよ。何かあつたらすぐ呼びに行きます」

「ありがとうございます、森村くん。さすが副会長！」

部屋から養護教諭が消え、私と森村と呼ばれた先輩と、ふたりきりになつた。

この人は、あの瀬名結子とどんな関係にあつたのだろう。同級生か、友だちか、恋人か。あんなに驚いた顔をするのだから、顔見知り程度じゃないだろう。どうして瀬名結子はさんざん非行をしながら、こんな普通の中学生と仲良くしていられたんだろう。どうして私は、同級生にすら理解してもらえなかつたのだろう。

自然と涙がこぼれた。声にならない声で、私は泣いた。

「えつ……。ど、どうしたの？」

カーテンを開いた森村先輩が狼狽えていた。どうやら様子を見に来たらしい。泣いているところを見られるなんて最悪だ。私は布団をかぶつた。

「ごめん。さつきといい今といい、入学式の日に嫌な気分にさせてしまつて」

カーテンを閉じて、シルエットから声がした。

「ただ、知り合いにすごく似ていたから、思わず声をかけてしまつて。そういえば彼女一人っ子だった。妹だつて居るわけがないのに妹なら、ここにいるよ。言つてやりたかった。あの非行少女の妹だよ、私は。」

「なんと言つてお詫びをしたらいか……」

私が返事をしないものだから、彼はいつまでも謝り続けた。けれど、ある時、それがピタリと止んだ。

そして、ガラつと大きな音を立ててカーテンが開いた。

「あれ？ 大丈夫？」

森村先輩は目を大きく開いてこちらを見ている。

「声がしないから、具合がわるいのかと思って」

心配そうにこちらを見ているので申し訳なくなつた私はポケットからメモ帳を取り出すと 声は出ない と書いて渡した。それを見て再び彼は驚いた。

「す、すまない」

吐き気はおさまりました。ありがとうございました

二枚目にはそう書いて手渡し、私はベッドを降りた。

「あ、あの。困つたことがあつたらいつでも言つて」

保健室を出ようとする私に、森村先輩は焦つたような声で言つた。そして、一枚の紙を私に持たせた。そこには彼のフルネームとメールアドレスが記されていた。その上には電話番号を消した跡がある。私は振り返つて彼の顔を見た。

「メールなら、大丈夫かと思って。何でも言つてくれていいよ」

私は小さくうなずいて意思を示した。どうやら悪い人ではないらしい。

「前に、同級生が死んじゃつて、俺、学級会長なのにもできなくて。だから、困つている人の話、ちゃんと聞かなきやつて思つてて、迷惑じやなかつたら……」

同級生。やつぱりそうだった。瀬名結子のことだ。

「私は瀬名結子じゃない」

数ヶ月ぶりに発した声は、大嫌いな人の名前だった。

「『、ごめんなさ……』

私の声は再び消えて行く。森村先輩は私の声を聞いて表情を曇らせた。

「瀬名のこと、知つてたんだ。『ごめん。本当にごめんね』
彼はなんども謝つていたけれど、私はその声を背にして保健室を出た。もつこの人とは会つまい。いや、この学校に通うものか。

その誓いがもうくも崩れることを、その時の私は全く知る由もなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8673r/>

鏡の中の私～プロローグ 「俺と天使？」続編

2011年10月7日23時02分発行